

# 5 広島平和記念公園と平和記念式典の空間演出



千代 章一郎  
SENDAI Shoichiro

広島大学大学院 / 工学研究科  
准教授

ヒロシマの復興において、平和記念公園は恒久平和のシンボルとして整備され、以降、毎年平和記念式典が開催されている。設計者である丹下健三の平和記念公園整備に対する考えと、そこで開催される平和記念式典の空間演出はどのようなものであったのだろうか。

## 平和記念式典

第二次世界大戦後70年以上が経過し、戦争の記憶の風化に対して様々な議論がされている。しかし「風化」という言葉は、記憶されるべき真実が存在するという前提に基づいている。もし仮に、記憶とはもっとダイナミックで、可変的で、いろいろな時代に生きる人々の心の痕跡であるならば、記憶はつねに生成を続けていくと考えることもできる。

1945年8月6日の被爆後、広島市では、速やかに設置された復興審議会や広島平和記念都市建設専門委員会によって平和記念公園が計画され、翌年には丹下健三(1913～2005)の案をもとに整備が開始された。

1947年から始まった平和記念式典は、1952年より平和記念公園中央の広場で毎年行われている。現在、この式典には被爆者や遺族、市民など多くの人が参加し、広島市長による平和宣言をはじめとし、原爆投下という歴史的な日を記念し、平和を訴えかける平和都市広島の意思を世界へ発信している。参列する者は、当事者としての市民であり、かつまた人類社会全体である。表面上は祝祭性、宗教性のない現代に特異な都市儀式である。

## 平和記念公園の構想

1949年7月、平和記念都市「広島」を象徴する公園の造営を目的として、競技設計が企画され、丹下健三らの案が一等入選する。しかし、丹下健三にとって、はじめに過去の記念碑は否定されるべきものであった。ところが、丹下健三は変節する。

1954年に発表した『広島計画(1946～1953)』には、「私たちが考えた広島のコミュニティ・センターは、しかしきわめて特殊なものであった。それは広島市民生活再建の中核的な施設であるばかりではなく、さらに、あの広島の記憶を統一のある平和運動にまで展開させてゆくための実践的な機能をもった施設であって、それに

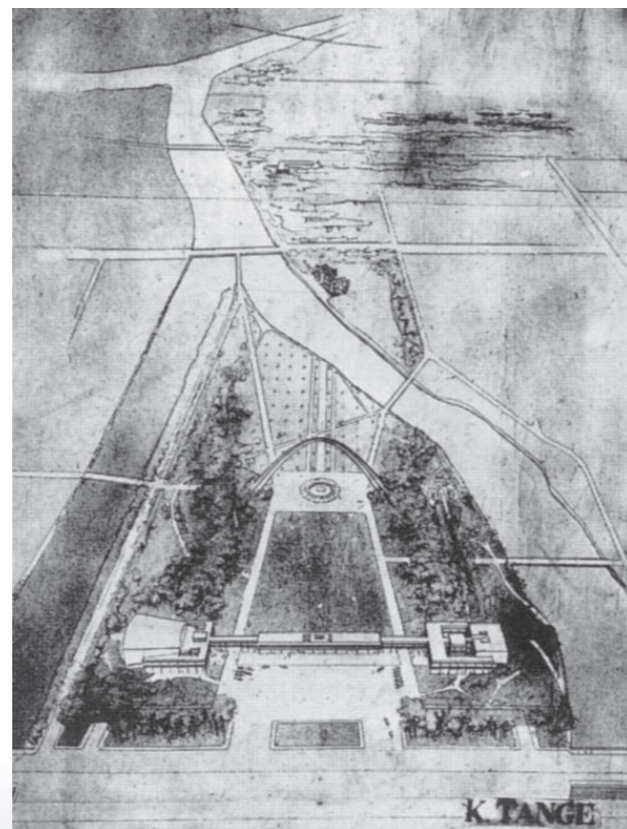


図1 丹下健三による「広島平和記念公園」設計競技の透視図(1949)

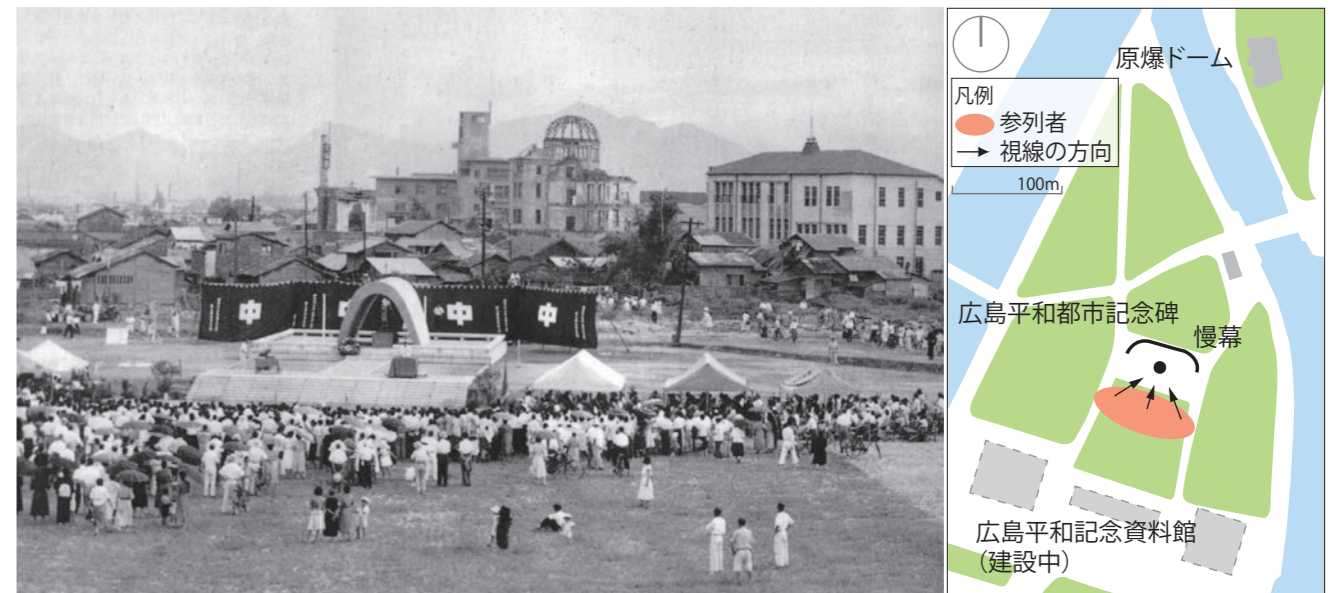


図2 平和記念式典における景観演出(第I期):1952年(昭和27年)

加えて、記念塔のごときものの必要を認めなかったのである。しかし、そのような判断にもかかわらず、私の心情は、迷わざるを得なかった。慰霊堂を含む記念塔を、広島の人びとが求めていることのなかに、意味があるように思えるのであった。無垢の犠牲者を、父や母や、妻や子にもつ広島の人びとの願いにたいして、何か慰霊し、祈念するための施設を、ささやかなものであるにしる、もちたいと感じたのである。これが、私たちの答であった」と書かれている。

高等学校時代を広島で過ごした丹下健三にとって、広島という土地に特別な思いがあったことは想像に難くない。しかし丹下健三は、素朴な同情や共感に駆り立てられて慰霊のための施設を構想したのではない。「平和を創り出すための工場」でありたいとし、その独特な言い方で、平和を観念的に祈念することと平和を創り出すという建設的な意味を併存させる。

そこで丹下健三は平和を過去の慰霊と未来の創造の半ば両義的な性格において読み取り、「100m道路を横軸(東西軸)とし、縦軸(南北軸)を原爆ドームに向けて引く。この十字軸は、動線に重なるだけでなく、視覚の軸ともなり、横軸の東の先には比治山が望まれ、西の端には丘陵が盛り上がる。縦軸の目指すのは、もちろん原爆ドーム。公園のなかを走る道路はつづみ形とし川向こうの道や100m道路と上手につなぐ」。原爆ドームを基点として、敷地を越えて南北東西の軸で都市全体に位置づけるという設計競技において他の誰も思いつかなかった構想である。

したがって、原爆ドームが存在しなければ、丹下健三

の構想は成り立たない。丹下健三が設計した平和記念公園の中心的な施設、広島平和記念資料館、広島平和記念館、広島市公会堂、広島平和都市記念碑などが順次竣工している。しかし原爆ドームは、新しい施設整備よりずっと後になって1966年に保存が決定している。もちろん原爆ドームの劣化によって巻き起こった保存運動の果実であるが、丹下健三が見出した平和記念公園の南北軸が保存に果たした役割も大きい。

## 平和記念式典における設営の変遷

平和記念式典そのものは、平和記念公園の事業よりも早くから始められている。1946年7月6日の中国新聞朝刊でも報道された「8月6日を戦争放棄世界平和の記念日として後世に伝えるとともに文化的平和都市として再建に努力する市民に希望を与える」ことを目的とし、平和復興市民大会が旧護国神社前広場で開催されている。翌年には、平和記念公園北端の慈仙寺鼻広場に建設された高さ10mの平和塔の前広場において、第一回となる平和記念式典が開催されている。

その後、慈仙寺鼻広場が平和公園になるため平和塔が除去され、1952年8月6日から毎年、平和記念公園中央に新設された広島平和都市記念碑の前広場で開催されている。以降、式典の設営形式はいくつかの変遷を経ている。

## 第I期(1952～1956年)

1952年、第一回となる平和記念式典において公園中央に広島平和都市記念碑が除幕される。平和記念公園

内には多くのバラックが残り、広島平和都市記念碑の裏には幔幕が張られる。記念碑裏に立ち並ぶバラックを隠すためであり、これによって参列者は記念碑前面に参列を限定される。

その後参列者は徐々に増え、1955年には平和記念会館、平和記念資料館、公会堂がそれぞれ開館したこともあり、式典の規模は一段と大きくなっていく。また、旧燃料会館付近など一部でバラックが撤去され植栽が施されるが、まだバラックが残存しているために、記念碑裏には幔幕が張られた状態である。

1954年8月6日の中国新聞の夕刊では「あの日赤くたれた七つの川はいま青い流れをたたえて、復興のツチ音はたゆみなく続いているが、生き残った傷ついた数千の生命はいまも死の恐怖にさらされたまま。そしていま原爆につぐ水爆一人類滅亡の危機のうちに迎えたこの日、三十五万の市民は悲しみと怒りを越えて、平和への決意を固める敬けんな祈りを捧げた」と伝えられ、都市全体の復興への期待と後遺症への不安や怒りが強く込められている。

### 第Ⅱ期（1957～1975年）

公園中央で初めて行われた平和記念式典から5年後の1957年になると、記念碑の裏側に立ち並んでいたバラックが撤去され、それまで張られていた幔幕がなくなる。さらに、原爆ドームの保存工事が完了し、バラック跡の軸線上に植栽が施され、周辺の道が整備されることで平和記念式典としての骨格が構成されていく。またこの年に設置された平和の池によって、記念碑と参列者との間に一定の距離が確保される。しかしこの時点では、参列者は記念碑を取り囲んでいることから、視線の方向は、一定方向に定まっていなかったことがわかる。

1963年から設置され始めた椅子は、当初資料館と記

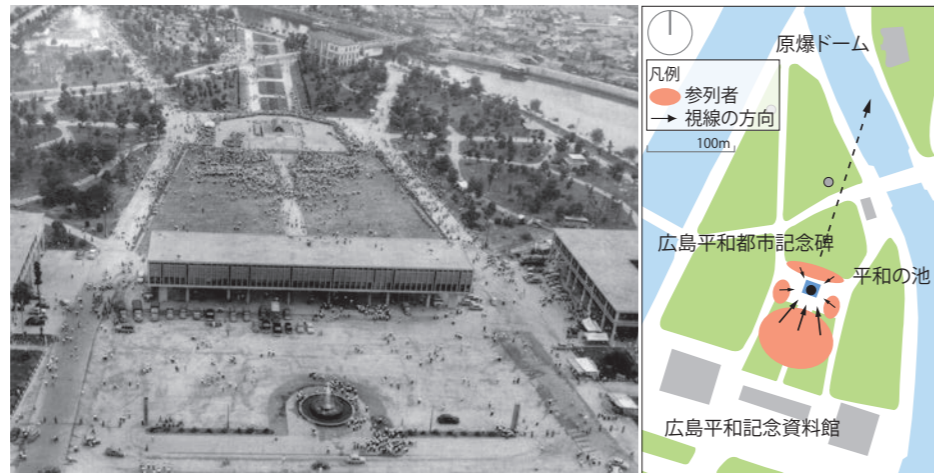


図3 平和記念式典における景観演出（第Ⅱ期）：1959年（昭和34年）

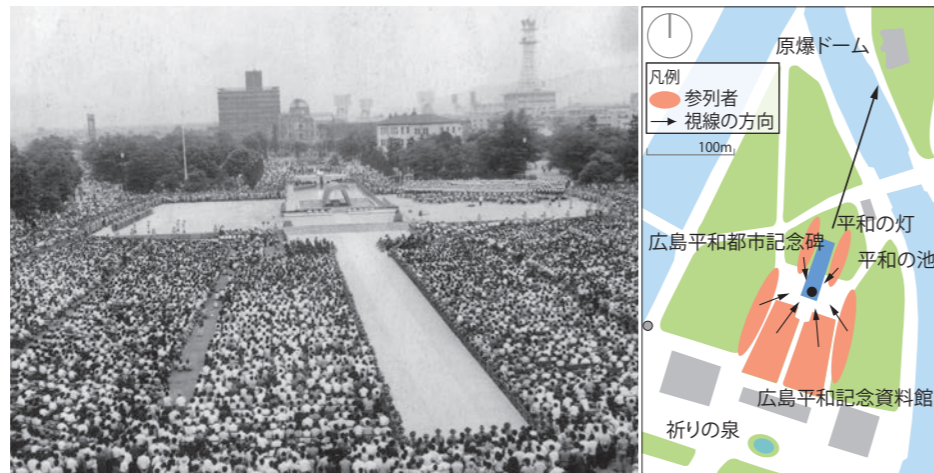


図4 平和記念式典における景観演出（第Ⅱ期）：1968年（昭和43年）

念碑を結ぶ直線道路を除く芝生広場の1/3程度の範囲であるが、1967年には芝生広場の西側全面、1968年からは芝生広場内全面に拡張される。これらによって、軸線上の直線道路を中心とした現在に近い式典となっていくが、平和の池の周辺にも参列者が並び、依然として、参列者の視線の方向は必ずしも一方向に定まっていなかった。

一方、広島市民球場や広島商工会議所の新社屋が原爆ドームの背後に見える。1963年8月6日の中国新聞朝刊では「町に目を向けると整然とした街路に、近代的な高層建築が立ち並び、活気にあふれている」と伝えられ、戦後復興の中で中心市街地の開発は、その質はともかく、平和の一部として肯定的に捉えられている。

### 第Ⅲ期（1975年～）

1975年以降、平和の池の両脇が立ち入り禁止になり参列者は記念碑前面の広場に限定され、記念碑から原爆ドームへと抜ける参列者の眺望が定まっていく。

また、2003年より暑さを避けるために芝生広場の南

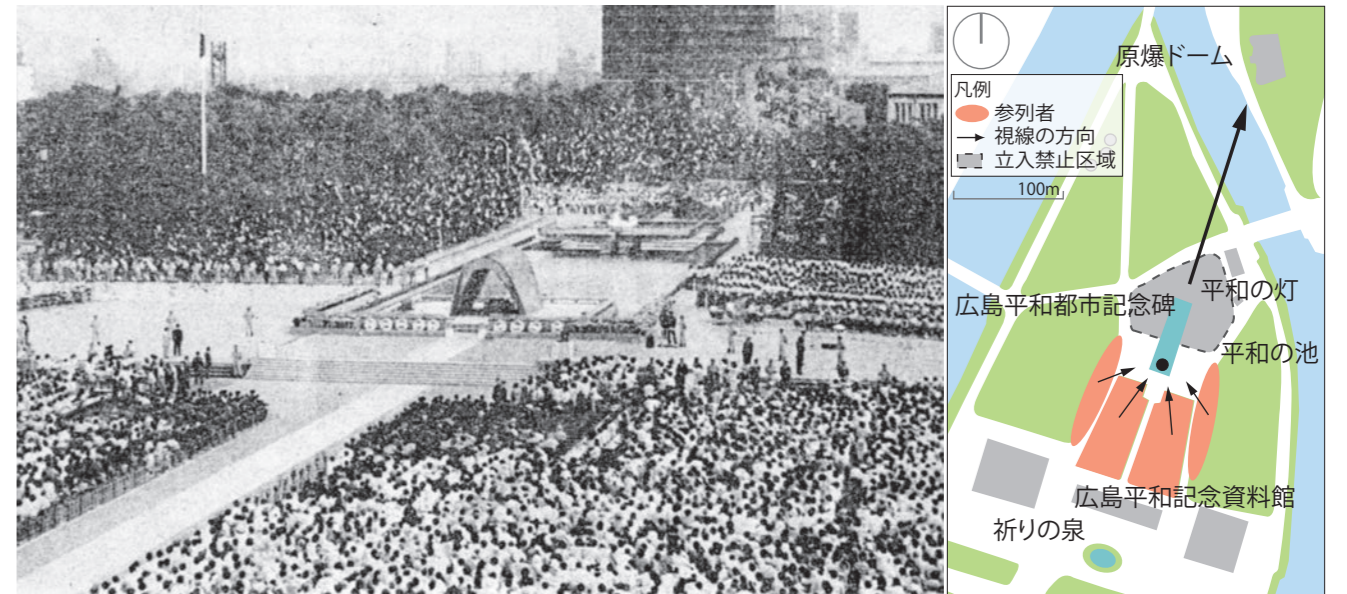


図5 平和記念式典における景観演出（第Ⅲ期）：1976年（昭和51年）

側にテントが設置される。以降2005年には16基、2009年には22基が、中央の軸線状の直線道路を中心に左右対称に設置され、参列者の集約が図られる。それによって、参列者の視線はある一定の方向性を獲得することになる。

しかし一方、原爆ドーム後方のみでなく、公園周辺に多くの商業施設やマンションといった高層ビルが見えている。1975年8月7日の中国新聞朝刊では「式典の場を取り巻く生い茂った木々が被爆30年の年輪を物語る。戦争を知らない少年少女から年老いた被爆者まで流れ献花して平和を願った」とあり、式典において、中心市街地の開発は等閑視され、さながら平和記念公園という劇場内の式典の内容のみが伝えられている。



写真1 2012年8月6日の平和記念式典

### 見えているものと見えるもの

丹下健三の構想においても、実際の整備事業においても、公園中央の南北軸線は平和記念公園の基本原則となっている。それは平和記念式典の設営についても同様であり、時代が下るにつれて、徐々に記念碑と原爆ドームを結ぶ南北軸が強調されていく。

一方で、平和記念式典においては、次第に原爆ドームの背景となる公園外に建ち並ぶ高層建物が視野に入りようになり、恒常的な景観が得られなくなっていく。それに伴って、式典のまなざしは利他的に変化する都市景観を排除し、平和記念公園内部に閉じていく。見えているものと見えるものとのずれが生じているのである。

記憶は、集団的記憶として一定の意味を定着していくことだけではない。人々の記憶は変化する。あるいは、丹下健三の言葉を借りれば、記憶は創られていく。それは都市開発という抗いがたい現実と、歴史的に積み重なっていくものとの総体のなかで醸成されていく。緑に包まれた平和記念公園のなかで、原爆ドームへの軸は外に開く唯一の回路として、新たな記憶を生成する仕掛けとなる。そこには、原爆死没者も、丹下健三も、建設した者も、生かされて祈る市民もいる。

<図・写真提供>

図1 『建築雑誌』第64巻、第756号、1949年10～11月、p.42  
図2、3、4、5 1952、1959年『都市の復興 広島被爆40年史』広島市企画調整局文化担当／1968、広島公文書館所蔵／1976年『中国新聞』1976年8月6日夕刊  
写真1 筆者